

貞信公亭

〔いにしへ北白河にあり、白河殿といふ。今詳ならず〕

貞信公 おほきおほいまうちきみの白河の家にまかり渡りて

侍けるに人のさうしにこもりて、

後 撰 しら河の瀧のいとみまほしけれどみだりに人をよせし物をや 中 務

延長八年とさの国にくだりて、承平五年に京にのぼりて、左大臣白

川殿におはします御ともにまうでたるに、歌つかふまつれとあれば

よめる、

家 集 百草の花のかげまでうつしつ、音もかはらぬ白川の水 貫 之

公任卿山荘

北白河の山庄に花のおもしろくさきて侍けるを見に

人々まうできたりければ、

拾 遺 春きてぞ人も問ける山里は花こそ宿のあるじ成けれ 公 任

敦道のみこのともに、大納言公任の家にまかりて、

又の日みこのつかはしける使につけて申侍ける、

新古今 おる人のそれなるからにあぢきなくみし我宿の花のかぞする 和泉式部

中将実方家

世中はかなく人々おほくなくなり侍ける頃、中将実方朝臣身まか

りて、十月許白川の家にまかりけるに、紅葉の一葉残れるを見て、

新古今 けふこずば見てややま、し山里の紅葉も人も常ならぬ世に 前大納言公任

北白川天満宮 〔白河村南の方にあり、土人生土神とす。例祭は九月十三日、神輿一基、鳥居の額、道晃法親王御

筆なり。撰社は山王、春日、八幡宮〕

照高院 〔同所にあり、聖護院退御所なり。開基は興意法親王、寺門の長吏聖護院の後浄珊寺と号す。殿舎は伏見城

松の丸を引移し、道晃法親王修補なさしめ給ふ〕

照高院宮にて山霞

黄葉集

あさなく霞に匂ふ面影のまぢかくみつる峯のしら雲

為 広

慶長四年九月八日三井寺講堂御再興ありて柱など

立られし頃、せうかうあん照高院へまいりてかくぞ申侍し、

衆妙集

たえにける三井の流をあらためて更に汲する法の水かな

玄 旨

寛文元年正月廿五日行幸しらかは白河照高院にありて暫為行宮、

里の名の今朝ふる雪にあらはれてこの山松の色もわかれず

御 製

ふる雪の色よりも猶里の名は世にあらはれん君が言の葉

照高院道晃

しんしやうぜんじ心性禅寺は同所北の方にあり、禅宗。本尊は阿弥陀仏の坐像、二尺余。開基は三洲りよう龍和尚なり。此所美景にして洛陽の万戸眼下に遮る。

うりふさん瓜生山

〔しんしやう心性寺の良にあり、元將軍地蔵の地なり。則古城の形存する事は前編に見へたり。心性寺門前より行程八

町なり〕

新勅撰

行人をとゞめかねてぞ瓜生山峰立あらし鹿も啼覽

謙 徳 公

名 寄

名に高くなりはじめつる瓜生坂霧のみ立ばみへずも有哉

恵 慶 法 師